

第一章 アーメン

天にまします我らの御父

——そしてあなたの御名は聖い——

でも、天において為される御心が

なぜ、この地上において行なわれることがないのでしょう？

なぜにわたしたちのすべてに

日々のパンを与えてはくだらないのですか？

あなたはなぜ、わたしたちが自分の不平不満を忘れるという

わたしたちの過失をお許しにはならないのですか？

わたしたちはなぜ、人を憎むという誘惑に負けてしまうのでしょうか？

我らの御父、もしあなたが天にいらっしゃるのなら

わたしたちが「アーメン」といえるように

なぜわたしたちをこの悪から救い出してくださらないのですか？

マリアツィラ・ベレストレロ「祈り」

Ruas Caladas (Rio de Janeiro, 1978), p. 59

主の祈りの最後は、響きわたる「アーメン」でしめくくられる。この amen という（ブライ語は、動詞 *am* を語根として持っているが、この *am* はまた「信仰」や「真実」、「保証」や「堅固さ」、「確信」などを指すヘブライ語の単語を構成する部分的要素でもある。聖書的に言えば、「信仰を持つ」ということは、ある真理を持っている以上のことを意味するのであり、それは、現実の不可思議で究極的な意味を信じて、おだやかに神に委ねることでもある。われわれは世界に向かって、人生に向かって、存在するすべてのものに向かって言うことができる。「アーメン——かくあらせたまえ！」と。それゆえに、信仰の対極にあるのは恐怖であり、より偉大な力に確信を持つて自らを委ねることができない態度である。われわれが不可思議かつ究極のものと感じ、すべての意味の背後にある意味として感じるこの偉大な存在

は、神として、すなわち究極の善と愛の父として認識される。それゆえに「アーメン」は、「そのようでありますように」という意味になるのである。この「アーメン」を唱えることにより、嘆願が、祈りが、そして賛美や賞賛が、一層強められ、確認され、そして改めて断言されるのである（ローマ 25、一一 36、ガラ 5、フィリ 4 20、一コリ 一六 24⁽¹²⁾）。

「アーメン」と唱えることは、すべてが父の手の中にあるということ信じ、信頼し、確信を持つていられるということである。このことばを唱える者は、どのようなことがあっても、不信や恐怖をすでに克服しているということなのである。主の祈りには、人間の天を志向する動きと地上に根を張ろうとする動きのすべての道すじを含んでいる。誰もがそこに、光の主題と暗やみの主題を見出す。われわれは主の祈りのすべてに對して、「はい、そのようであつてください！」と唱えるのである。そして悪の脅威に對し、誘惑に對し、われわれが受ける侮辱に對し、そして日々のパンを求める苦悩に對し、「はい」といい、「アーメン」と唱えることができるというのも、ひとえにわれわれが、神はわれわれの父であり、われわれは神の聖い御名に捧げられており、神の国の到来を信じている、そして、神の御心は天においてと同様、ほんかくこの地上においても行なわれるという確信を抱き続けるからである。

主の祈りは先ず、目を天に、すなわちわれわれの救いのきたる所に向ける人びとの確信と共に唱えられ始める。次いで人間の苦しみ、抑圧からの解放を願う嘆願がおこなわれ、最後にま

た、同じ確信をもってアーメンが唱えられる。この確信と信頼の出発点は、われわれに主の祈りを唱えるよう教えたイエス自身に見出される。イエスは、われわれの弁証法的存在と共にある矛盾をすべて御自身に引き受けられ、われわれをその矛盾から完全に救い出してくださる。

聖パウロは素晴らしい洞察力をもってこのことを伝えている。「この方においては『然り』だけが実現したのです」(二コリ一19)。神がわれわれに約束したことの全て——「主の祈り」は神の約束を約言しており、永遠の生命と地上の生命の両方を約束している——は「イエスにおいて『然り』となった」(二コリ一20)のである。聖ヨハネはまた、イエスとは疑問の余地を残さず「アーメンである方」(黙三14)と述べている。⁽¹²⁾

もしイエスが、主の祈りにつけ加えられる「アーメン」であるなら、そのとき、われわれは、神はつねにわれわれのことばに耳を傾けてくださると思つてよい最大の拠りどころを得たことになる。われわれが必要とするものを得られると確信する以上に大きな意味を持つのは、御父がわれわれを保護してくださっているとの確信、これを再確認することなのである。アーメン。

カトリック教会にとって今年（一九九一年）は、一八九一年レオ十三世教皇の回勅「労働者の境遇について」発布の百周年にあたります。この間、カトリック社会教説が数多く出されました。第二バチカン公会議（一九六二―六五年）を契機に、従来の護教的姿勢、上から下に演繹的に真理を述べるという権威主義的姿勢から下から上に具体的現実の問題から出発して真理を探索し続けるという謙虚な姿勢へと教会は変わりました。現代世界の諸問題を前に、その解決に取り組もうとする時、そこには当然内向きの教会本位の姿勢から、他の諸宗教や多くの善意の人々と協力し合って関わっていかうとする姿勢への変化が見られます。その成果として、キリスト教の原点となる聖書と伝統への立ち帰りと、現代世界の状況の再認識に基づく「現代化」^{モダニゼーション}があげられます。①開かれた教会、②対話の教会、③貧しい人々優先の教会へと変わりつつあります。その公文書「現代世界憲章」の冒頭で、現代の人々の悲しみ、苦しみ、喜び、希望、とくに貧しい人々の痛みは私たちキリスト者のものであるということが打ち出されまし

た。

本書はまさに、こうしたことを背景にして生み出されたものです。「主の祈り」について解説している書物や記事は数多くありますが、本書のように分かりやすく、充実した内容のものにはじめて出会いました。解放の神学者である著者は、ラテンアメリカをはじめ第三世界でその制度的罪・不正ゆえに苦しんでいる人々の視点から、そして信仰の社会的側面を重んじる視点から、「主の祈り」を解説しています。このような意義深い内容の書物を、一人でも多くの日本人に読んでいただきたいという願いをもって訳させていただきました。

以下、少し長くなりますが、著者の指摘の中から、とくに印象に残ることを味わいながら、「主の祈り」の一句一句をかみしめつつ、まとめてみたいと思います。

キリスト教信仰の視野は、來世を向いていますが、その視野から政治的活動を観想し、社会的活動に命を吹き込むものです。

主の祈りを実際に行う中で、私たちは、神と人間の正しい関係、天国と地上の、また信仰と政治の間の正しい関係を感じ得します。

主の祈りが含む事柄は、激しい矛盾を表わした絵であり、人間の実存を揺さぶるショックであります。

1 天におられるわたしたちの父よ

「アッバ」ということばで示される神との親しさは、神の国の近さと合致します。自分たちが御父の手の中にあることに気づいて確信を持つようになれば、人々はこの世での執着から解放され、必要な一事、神の国をひたすら望むようになります。私たちは、この世をサクンの国から神の国に変えるべく闘うよう求められており、だからこそ「われらの父よ」と祈ることが、いっそう現実味を帯びています。

2 御名が崇められますように。

神は歴史の舞台で圧制を受ける者の側に立ち、こうした人々の解放に向けて闘い、行動する者によって聖化されます。御父の聖なる名は、社会の底辺にある人々との連帯を求める者たち、つまり社会の中で人と人とはより平等な関係を築けるよう闘うという社会的働きの中に参与している人々によって、最も聖なるものとされます。

3 御国が来ますように

神の国はイエスによって宣言された希望と喜びのメッセージです。神の国は①世界的、普遍的であり、宗教を含め何ものにも還元され得ないもの、②構造的であり、構造的変革をもたら

すもの、③決定的で、この世の終りを示すものです。神の国は私たちのただ中にあります。

4 御心が行われますように、天におけるように地の上にも

イエスにとって神の意志とは、紛れもなく神の国を築くことでした。ゆえに神の国建設の宣言がイエスの教えの中心テーマとなっています。一人も失わず、互いに助け合いながら完全な生の高みへと達することが神の国に込められた意味です。

神の国の対極に位置するのがサタンの国です。イエスは、神の国はすでに実現に向かって動き出しており、悔い改めて福音を信じるようにと述べています（マルコ15）。神の意志には忍耐、神の神秘に対する謙虚な服従、あきらめといった要素さえ関与しています。

今日の私たちは、とくに構造的な罪、社会的不正という事態に直面しています。人間の社会的関係において、つまり経済・政治・文化的機構において、聖化を実現することが最大の眼目です。神の国を目ざす変革から除外されるいかなる領域、空間もありません。新しい天、地の発酵はあらゆるところから始まります。

5 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

この嘆願は主の祈りの中の転換点をなしています。神の国においては物質的なものと精神的

なもの、人間性と宇宙、創造主と被造物が組み合うようになるのです。人間の命は物質と分かち難く結び合わさっています。私たちの永遠の運命は、究極的にはパンと水、衣類、それに他の人々との連帯と切り離して考えるわけにはいきません（マタ二五31〜46）。私たちの胃は、重要さにおいて心臓や頭脳と並ぶ存在です。物質は現実の聖なる手段となります。

パンは歴史世界における神の国のシンボルです。日々食べつくすパンの背後には、巨大な人の関係性という網状組織の全体が隠されています。このパンが、もし搾取の結果であるなら、それは神の祝福を受けたパンではありません。パンは私たちに集団的回心を迫っています。私たちのパンだけが、神のパンなのです。

日ごとに必要とされるパンを嘆願するのです。パンは神聖です。決して侵してはならない生命の神秘と深いつながりを持っているからです。

6 わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

ここには商取引はなく、「ひもつき」もありません。これはイエスによって私たちに伝えられる神の体験の新しい側面です。他者を愛するということは神に出会うということであり、神を愛するということは隣人を愛するということです（一ヨハ四20）。

ここにも社会的側面があります。私たちの誰もが罪人の共同体の一人です。私たちはみな神に、そして兄弟姉妹に負い目を持って生きています。私たちの共同体、社会の生命を支えるパンは赦してあり、相互の慈しみです。

私たちの誰もが、心にとがめを感じる体験を持っています（ヤコ三2、一ヨハ一8）。御父の慈しみ（ルカ一五1〜32）をこの世において体験するイエスはやはり慈しみ深く、恵み深い存在であります（ルカ六35、36）。

福音は、イエスが示された新しい発想（マコ二5、17）を私たちが理解する時のみ、良き知らせとして実感されます。神の赦しは限界を知りません（マタ一八26）。

7 わたしたちを誘惑に遭わせず

私たちは一方では地上を志向し（ロマ八6、ガラ五19、20）、他方では天上を志向しています（ガラ五22）。人間とは本来的に誘惑に陥りやすい存在です。悪は誘惑を持つこと、感じることにあるのでなく、それに屈するところにあります。私たちは神に対して、誘惑そのものを取り除いてほしいと願うのではなく、誘惑に直面した時、私たちを守って下さいとするので

人間性の最大の不幸は、それがかつて誘惑を受け、現在もなお誘惑に陥り続けていることです。

す。「正しさ」とは元来、人間にそなわる肉と霊のあらゆる躍動性を、私たちの父である神に、そして私たちの兄弟姉妹である他者に、さらには世界に統合する力、能力のことでした。しかし罪によって、これらのよりどころは揺るがされました。人間はこの悲劇的狀況から脱け出し得るのでしょうか？（ロマ七25）。

イエスは真に人間であり、試みを受けたので、誘惑される人間を救うことができます。イエスはその肉において（ロマ八3）誘惑に遭うことにより、誘惑を自らの肉に引き受けて死に、罪の歴史全体に勝利したのです。イエスの偉大さは誘惑のないところに見出されるのではなく、すべての誘惑に打ち勝ったその力の中に見出されるのです。

この祈りの部分には、普遍的な終末論的次元とともに、人間ひとりひとりの人格的次元も含まれています。神の国に対する私たちの確信を揺るがせ、人間を救うという神の意志に疑いを投げかける可能性があります。そんな時、この祈りを唱えねばなりません。

8 悪い者から救ってください

私たちは悪をみくびってはならず、悪に対する警戒を決してゆるめてはなりません。悪は力強く、歴史と共に動き、私たちの生を設計するもので、構造的なものです。この構造は、罪と邪惡の自己独自のシナリオを作り出し、「罪の構造」（プエブラ会議第九二項）が生じます。

この「構造的罪」がラテン・アメリカで形成され、「深刻な構造的対立」を露呈しています。ひと握りの人間の富が増大し、大多数の人間が貧窮の度を強めています(第二二〇九項)。このシステムは対立や争いの支配する、経済的、政治的筋書きを生み落としていきます。そこに生きる人々はその社会生活をこのシステムに一体化させられます。このシステムは本質的に排他的・独占的なシステムです。罪は私たちが奴隷状態にあると感じるところまで、ひとりひとりに力をふるいます(ロマ七14、19、23)。

私たちはヨハネが世の罪(ヨハ一29)と呼んでいる「罪の状況」の中に生きています。神によって作られた良き被造物はことごとく、人間の歴史的悪業によって汚され、「罪が世に入った」(ロマ五12)のです。歴史的に作り出されたこの状況が、そこに生を受けた人々の運命の内容となり、「世の罪」ゆえに、人間はこのプロセスに組み込まれ、参加していくのです。しかし私たちは、古いアダム以上に、新しいアダムとの間にもっと深く、大きな一致があるのです(ロマ五20、17)。

悪の背後にいるのは何者でしょうか？ その霊的な存在は「誘惑する者」(マタ四3)、「敵」(同一三39、ルカ一〇19)、「悪魔」(マター一三39)、「サタン」(マコ三23、26、四15)「ベルゼブ」(マター二24)、「この世の支配者」(ヨハ一三1)と呼ばれています。

ところで、イエスにとっての最大の関心事は、悪い者に対する勝利というよりむしろ、神に

よる救済、とくに貧しい者、弱い者、社会の底辺に追いやられた人々に対する救いの計画という福音の宣言なのです。世界の害悪のおもな原因は、私たちの冷淡な心、連帯の欠如、愛の不毛です。イエスがフアリサイ派の人々に批判するものも、これでした（マタ二三23）。イエスに従う上で求められているのは、新しい価値観、心の状態、真に解放された自由の態度を創り出すことです（ロマ八31）。

人生の旅路の最終コーナーにおいて、数々の障害が出現し、多くの落とし穴が口を開き、目的地に到達するばかりになっているこの企てから人間を逸脱させようと、危険やワナが待ち構えています。この危険は、現在もいつも仕組まれており、あらゆるところに身をひそめ、私たちを滅ぼそうと狙っています。だからこそ私たちは大声で叫ぶのです。

「父よ、どうか私たちを悪い者から、すべての悪から救って下さい！ 悪い者の策略から救い出して下さい！ 私たちが善の道からはずれないように守って下さい！ 私たちにあなたを見捨てさせないように、導いて下さい！」と。

私たちが心の奥底から祈り、願えば、私たちには再び自信が甦ってきます。なぜならその保証を与えて下さっているのは、イエスだからです（ヨハ一四14、同一六33、ルカ二一28）。

9
アーメン

主の祈りの最後は、響きわたる「アーメン」でしめくくられます。ヘブライ語の *amen* は信仰、真実、保証、堅固さ、確信などを指す単語の部分的要素でもあります。聖書的に「信仰を持つ」とは、ある真理を持っている以上のことを意味します。それは、現実の不可思議で、究極的な意味を信じて、おだやかに神に委ねることであります。

私たちは世界に、生命に、存在するすべてのものに向かって言うことができます「アーメン——かくあらせ給えー」と。この「アーメン」を唱えることにより、嘆願が祈りが、賛美がいっそう強められ、確認され、改めて断言されるのです（ローマ 25、一一36）。「アーメン」と唱えることは、すべてが御父の御手の中にあるということを信じ、信頼し、これに確信を持っていられるということです。どのようなことがあっても、不信や恐怖をすでに克服しているということです。

私たちは主の祈りのすべてに対して「はい、そのようであって下さい！」と唱えるのです。そして、悪の脅威、誘惑に対し、私たちが受ける侮辱に対し、そして日々のパンを求める苦悩に対し、「はい、アーメン」と言えるのも、ひとえに私たちが、神は私たちの御父であり、私たちは神の聖い御名に捧げられており、神の国の到来を信じ、神の御心は天においてと同様、ほどなくこの地上においても行なわれる、という確信を抱き続けるからです。

この確信と信頼の出発点は、私たちに主の祈りを唱えるよう教えたイエス自身に見出されま

す。イエスは私たちにある矛盾をすべて御自身に引き受けられ、私たちをその矛盾から完全に救い出して下さいます。

神が私たちに約束したことのすべて——「主の祈り」は神の約束を約言しており、永遠の生命と地上の生命の両方を約束しています——は「イエスにおいて『然り』となった」(二コリ一19、20)のです。イエスとは疑問の余地を残さず、「アーメンである方」(黙三14)です。

イエスが、主の祈りにつけ加えられる「アーメン」であるなら、そのとき、私たちは、神はつねに私たちのことばに耳を傾けて下さると思つてよい最大の抛りどころを得たことになりました。私たちが必要とするものを得られると確信する以上に大きな意味を持つのは、御父が私たちを保護して下さっているとの確信、これを再確認することです。

最後になりましたが、G・グティエレス著『ヨブ記』同様、本書の訳すべてに目を通し、分かりやすい訳に直して下さった教文館の森島和子氏のご尽力に対して心から感謝致します。

一九九一年三月一〇日

山田 経 三